

## 利用者が東日本大震災被災者支援に取り組んで ＝「被災地の子どもたちに木のおもちゃを贈ろう！」＝

○渡辺さやか、石川英五郎、根本美寿々、平松謙一  
社会福祉法人おあしす福祉会

### 1、はじめに

社会福祉法人おあしす福祉会（以下「おあしす」）は、江東区内で5ヶ所の通所施設（就労継続B型2ヶ所、地域活動支援センター1ヶ所、小規模通所授産1ヶ所、共同作業所1ヶ所）と2ヶ所のグループホームを運営、また港区から地域生活支援センターの運営を委託されている。江東区内の通所施設利用者は200名を超え、利用者の多くは統合失調症圏の患者である。就労支援事業は、給食、清掃、リサイクルショップ運営、木のおもちゃや楽器の製造販売、下請作業などである。

### 2、おあしすの被災地へ向けた支援活動

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、通所中の利用者にパニックを引き起こした。その後、「関東で巨大地震が起これたら」という不安と、被災地の惨状を目にして「何も出来ない無力感」が利用者を支配した。しかし、利用者の中から「被災された方々のために何かできないだろうか」と声があがりはじめ、義援金の募集、リサイクルショップでのチャリティ販売、利用者の夏のボーナス捻出活動の利益の20%を義援金とすることなど、利用者と職員が一体となって様々な被災者への支援が始まった。

おあしすでは、1994年から木のおもちゃや楽器の製造・販売を行っている。当時は下請作業がほとんどであったが、単調な下請作業の繰り返しではなく、木のおもちゃの製作によって、利用者が、ものづくりの喜び、「子どもたちに夢をあたえる喜び」を得ることを目指してきた。また、毎年夏休みには、地域の子どもたちを対象に「木工教室」を開催し、利用者が子どもたちに直接木工を教える活動を行ってきた。東日本大震災以後、木工事業部では、「子どもたちに笑顔を取り戻してほしい」と被災した子どもたちに木のおもちゃを贈る活動に取り組むことになった。

### 3、「被災地への木工寄贈」活動の概要

この活動に関わった木工事業部利用者は7名。新聞社の協力も得て「被災地の子どもたちに木のおもちゃを贈る」活動を紹介。5月下旬以降、被災地から「木のおもちゃを贈ってほしい」との依頼が届き始める。依頼主は一般家庭だけでなく、幼稚園や保育園、障害者施設など多岐にわたり、8月末までに16ヶ所、41人の子どもたちに贈った。

木工事業部利用者は品物の選定、梱包などの発送作業を担うほか、一人ひとりに宛てて自分たちの写真と手書きのメッセージを添えて品物を贈った。

そして、送り先である被災地の方々からは、木工事業部の利用者あてにお礼のメッセージだけでなく、おもちゃを手にして笑顔を見せる子どもたちの写真が寄せられている。

### 4、結果と考察：この活動の意義

本活動に参加した利用者の変化を、PACE（L. Ahern & D. Fisher）のリカバリー・モデルに基づいて作成したアンケートで評価した。その結果、14項目の全てでリカバリーが促進されていた。

この活動を通じて、被災者と利用者とは直に結びつくことができ、震災で困っている人たちに対して、「何もできない」存在から、「誰かの力になれた」という思いをいっそう強くさせることにつながったと考える。困っている人を助けることで、自分自身が存在する意味が確認できたこと。「自分も誰かの力になることができる存在なのだ」という経験ができたこと。これらの手応えは、利用者一人ひとりが生きていく上で、大きな自信になり、彼らの回復に大きく寄与してくものと考えられる。

本発表の主旨は、木工事業部利用者、および寄贈先の施設や保護者の同意を得た。